

「神の力に支えられて」(第二テモテ一・二〜一〇)

1 パウロとテモテ

私の人生を変えてくれた人、そんなテーマで、八月の終わり、24時間テレビなるものが流れていました。見たわけではないのですが、少しいやみなこのテーマだけはしばらく耳に残っていました。

しかしあらためて、自分にそう問うてみると、私も何人かの先生の顔を思い起こします。みなさんもそれぞれにそうした人をきつと思ひ出されると思います。出会いですね。出会いというのはこちらでお膳立てできない、人間の計らいをこえた出来事です。ですから同じ人との関係でも、他の人に出会いとなっても自分には出会いにならない、その逆も起こりうるものです。受けとめるだけのものがこちらにないと出会いは出会いとならない、何も起こらないということでしょうか。

もっと重要なことは、出会いというのは、後から分かるものかどうかです。後からふりかえって、あるとき、あの人と言葉を交わさなかったら、とか、あるとき別の選択をしていたらとか、ですから後から分かるというのが出会いの独特の性格なのです。そうした、人との、あるいは何事かとの出会いによって、神様が私どもの人生に臨んでくださっていたということ。後から分かるのが神です。そうすると、自分の人生を変えてくれた人は、という質問は、これまでのところ、ということになります。その答えは、これからの生き方によって変わってくるということでもあるのだと思います。そしてそうした出会いの連続が私どもの人生をつくりあげていくのです。そこに神様も関わっています。そうした私どもの歩みは終わっていない、つづいている、開かれている、年をとつても生涯の終わりまで出会いに開かれているということです。

いま申し上げていることをいささか強引に私どものテモテに当てはめれば、彼の人生を変えた人、それは使徒パウロに違いありません。パウロとの出会いが、テモテという信仰者、伝道者を生み出しました。

二回目の伝道旅行に出発したパウロが、小アジア・ルステラの町で、テモテという青年に出会ったことは使徒言行録一六章に伝えられています。パウロとテモテ、この二人は、年齢では、あるいは三〇才ぐらいの違いはあったと思います。ルステラにパウロがやってきたのは、彼が五〇才ぐらいの時です。その時テモテは二〇才ぐらいであったでしょう。

やがてテモテは、パウロの最愛の弟子としてばかりでなく、パウロの同労者、その最も忠実な若い協力者となっていくきます。いくつかのパウロの手紙では、その共同の差出人としても名をのべています。

ボーレン(1920-2010)というスイス出身の神学者が昔来日したさいの講演でこのパウロとテモテの特別の関係について、こう言っていたのを今もおぼえています。パウロは自らの伝道と教会の、実りも、課題も、慰めも、それを、だれよりもまずテモテ

において確かめていたのだと。パウロの宣教の言葉は、テモテに分からなければおそらくだれにも分かってもらえないだろうし、テモテにおいて福音が力とならなければだれの力にもならないだろう、そのようにして、テモテはパウロにとって、なくてはならない存在であったというのです。そのような関係の中で、テモテは、パウロにとつて、つねに大きな慰めとなり、また励ましとなっていたであろうと、ボーレンさんは述べています。テモテはパウロによってその人生を変えられた。パウロはテモテに自らの支えを見いだしたのです。

2 臆する霊ではなく

今日の聖書のはじめのほうに書かれていることは、そのようなパウロとテモテの信頼に満ちた関係を、もつともよく表している箇所の一つです。

わたしは、昼も夜も祈りの中で絶えずあなたを思い起こし、先祖に倣い清い良心をもつて仕えている神に、感謝しています。わたしは、あなたの涙を忘れることができず、ぜひあなたに会って、喜びで満たされたいと願っています。そしてあなたが抱いている純真な信仰を思い起こしています。その信仰は、まずあなたの祖母ロイスと母エウニケに宿りましたが、それがあなたにも宿っていると、わたしは確信しています (3-5節)。

「あなたの涙を忘れることができず」とあります。使徒言行録にはそれを直接指示する箇所はありませんが、その意味は、一つは、パウロと最後に会った、その別れに際しての涙とも (使徒 20:37)、もう一つは、さまざまな労苦の涙ともとることができま (使徒 20:19)。

そうした愛する弟子、若い同労者であり、信頼するテモテの労苦を思いやりながらパウロはこう語っています。

わたしが手を置いたことによってあなたに与えられている神の賜物を、再び燃え立たせるように勧めます。神は、おくびようの霊ではなく、力と愛と思慮分別の霊をわたしたちにくださったのです。だから、わたしたちの主を証しすることもわたしが主の囚人であることも恥じてはなりません (6-8節)。

パウロはここで何よりも、神は、私どもを「おくびよう」にさせる力として働いているのではないと語っています。

この「臆病」と訳されたもとの言葉は新約聖書ではここでしか使われていない言葉です。口語訳では「おそれ」と訳されていましたが、たんに恐れではなく、怖じ気づく、恥じる、臆するというような意味です。

神は「おくびようの霊」をくださったのではないと、真っ先に言っているところを見ると、テモテにはどこか「おくびよう」な、「臆する」気持ちがあったのでしよう

か。パウロ先生が囚われの身であることで、こころが萎えるような、それを恥ずかしく思うような気持ちがあるいは相当強くあったのでしょうか。

詳しいことは分かりませんが、あるいは相当強くあったのでしょうか。詳しいことは分かりませんが、他の聖書箇所を参照して見ると、テモテは必ずしも健康にすぐれず、性格的にも臆するところがあり、その若さのゆえに教会で軽んじられることもあったようです。それに誤った信仰理解に立つ異端の人々に苦しめられるといういつそう大きな問題の中に、彼も、そして教会も、じっさいおかれていたのです。臆する、おそれるのは、たんに個人的な理由からだけではない、そうではなくて、まさに教会をおびやかす異端という問題との関連で自らの信仰をはっきり証する、その点でも臆するところがあったのかも知れません。

しかし臆するということなら、問題はテモテだけのことで決してない。それは私どもの問題でもあります。私どもの信仰生活の場はこの世です。しかしこの世において、社会生活の中で、私どもはいわばカメレオンのような信仰になりがちです。周りの色にあわせて、好んで、埋没していくことになりかねない。ことさら異をとねえるのが信仰者ではない。しかし何が神の御旨か、何が善かわきまえておりながら、なおも、それを、まわりの様子をうかがいながら隠したり実行できなかつたりしているとするれば、テモテへの勧めはまた私どもへの勧めでもなければなりません。私どもの信仰の告白が具体的な個々の事柄に対する私どもの態度決定によって明らかにされるということになれば本当に素晴らしいことです。言葉において行いにおいて、教会もまた個人においても、臆することなくありたいと願うものです。

3 聖なる招き

神は私どもに私どもを臆病にさせるものとして臨んでいてのではない、働いているのではない。そうではない。そうではなくて、私どもに力を与え、愛を可能にし、思慮深くさせるものとして現在も働いておられるのだと、パウロはテモテに語りかけています。私どもに与えられているのは「力と愛と思慮分別の霊」です。それが按手を受けたテモテに、洗礼を受けた私どもに与えられています。

力というのは、臆病やおそれと反対のもので、私どもを私どもの内側から押し出す力です。神の力です。人間の力ではありません。その霊において神は働き、おそれと臆病から私どもを自由にします。

しかしこの私どもに働く力、神の力は、愛において働く力です。兄弟をつまづかせたり、支配したり、自我を押し通すことにおいても力を発揮する力、力そのものではないのです。力は愛に仕えます。愛に仕えなければならぬ。愛においてコントロールされます。

この愛において働く力は、私どもが神のみこころを知り、神のみこころにそって歩むときに豊かになります。何が神のみこころか、何が良いことで神に喜ばれることを明らかにするのが思慮の霊です。私どもの新共同訳は「思慮分別の霊」と訳していますが、口語訳は慎みの霊と訳しています。「分別」という言葉はあまり使いたくない

いので、思慮の霊、思慮深さの霊とでも訳しておきましょうか。思慮深い判断の霊ということです。思慮深さへと私どもは、神様を度外視したときに、私どもの知恵と知識をつくすときに行きつくものではありません。神の霊がそこに臨んでいるときに、プレゼンスしているときに、私どもはいろんな思い込みや偏見から自由になります。正気になります。状況を冷静に認識し、歩むべき道を知り、その道を歩む規律を与えられます。それが思慮の霊です。それによつて神以外のものに動かされず、何がみこころなのか弁えるようになります。そのような霊が思慮の霊です。こうしてパウロは伝道と牧会の現場で労苦する若いテモテに按手を受け任職されたときに与えられた霊の賜物に注意するように、もう一度そこに立ち返つて歩むように勧めたのでした。

しかしここでパウロが、もっと大きな視点に立つてテモテに語りかけていることにも私どもは注意したいと思います。

むしろ、神の力に支えられて、福音のために、わたしと共に苦しみを忍んでください (8節後半)。

テモテには涙もありました。臆する思いもありました。主を証しすること、先生のパウロの入獄を恥じるような思いもなくはなかったのです。しかしそうしたことを越えて、テモテも、そしておそらく私どもも、神様の大きなご計画の中にあつて、福音のために、福音の証しの道を歩むべきなのです。

福音とは恵みです。神は恵み深い。それが福音です。それが明らかになつたのはイエス・キリストにおいてです。みなさんの知っている範囲で結構です。聖書の、あるいは福音書のイエスのことを思い浮かべてください。彼の振るまい、彼の言葉、彼の人となりです。それをじつと考えれば、そこに恵み深さ以外のことは伝わってこないのではないでしょう。ヨハネによる福音書に、次のような言葉があります。「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのです」(1:18)。「この方が神を示された」。イエス・キリストがその父である神を示された。このイエスから恵み以外のものが伝わってこないとすれば、神ご自身も、私どもは見ることがない、その声を聞いたこともない、触れたこともない神もまた同じく恵み深い、憐れみに富む。この恵みの証しのためにテモテもパウロも私どもも召し出され、呼び出されたのです。

むしろテモテも、私どもも、自分の力で、福音の証しを担うということなどはできません。「神の力に支えられて」でなければ、神の「できる」によらなければ私どもも何事もできないのです。神の力に支えられて年度の後半も礼拝を中心に教会の宣教の働きに共にあずかってまいりましょう。

(二〇一八年九月一六日)